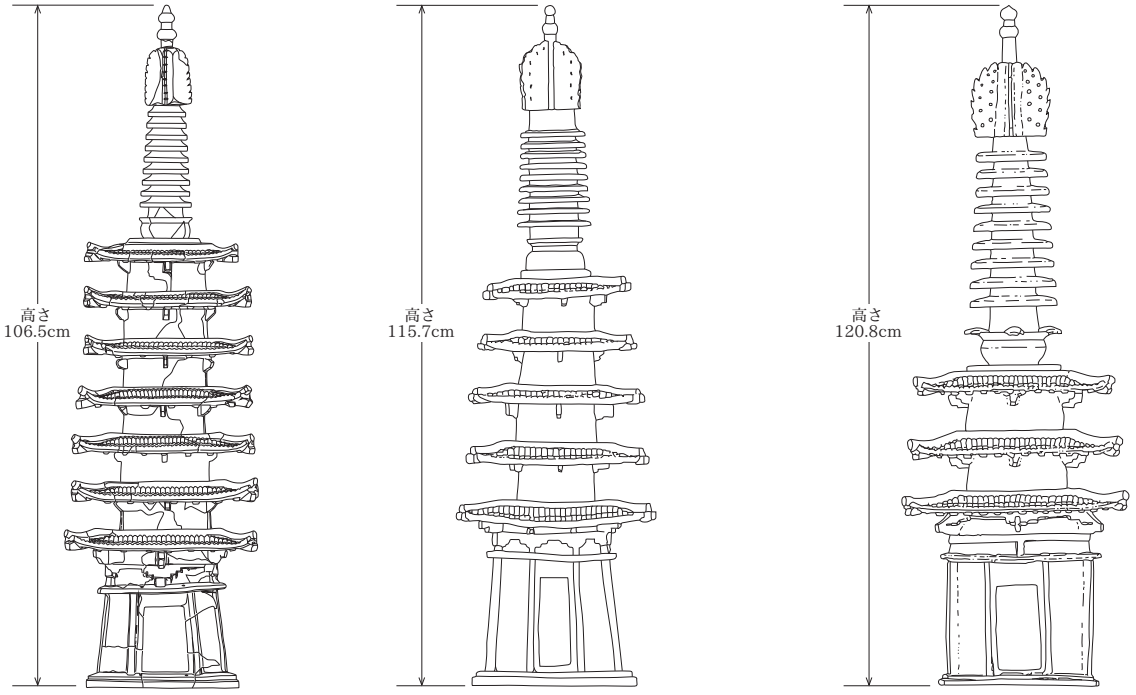
第４節　瓦塔について

沖ノ羽遺跡から瓦塔は、22 点（1 点未実測）出土している。現在、第 25 次調査までおこなわれている沖ノ羽遺跡内で瓦塔が出土したのは第 18･19 次調査に限定される。希少性を考慮し、概要を記して若干の考察を行う。

出土した瓦塔の破片は、瓦塔屋蓋部が 20 点、宝珠部 1 点、基壇部 1 点である。出土状況を第 48 図に示した。出土状況は散在的で第 18 次調査 2 区で 10 点、第 18 次調査 3 区で 5 点、第 19 次調査 1 区で 6 点、第 19 次調査 2 区で 1 点出土している。包含層出土が多いが、一部遺構に他の土器が伴う出土例もある。瓦塔の胎土は石英と長石が比較的多く入り、色調も灰白色～浅黄橙色で、沖ノ羽遺跡出土に一般的な土師器長甕や鍋などと同様な胎土状況である。破片の接合や同一個体識別を試みたが不明瞭であった。屋蓋部についても何層のものか不明である。宝珠と基壇部が出土していることから 1 個体の瓦塔が存在したことは確実であり、破片数から考えてそれほど多くの個体は無いと思われる。瓦塔の場合、大部分は五重の塔である〔石村 1976〕。一部、三重あるいは七重の塔がある（第 47 図）。瓦塔 1 基が祀られる場合と瓦塔 2 基でセットになる場合、瓦塔と瓦堂がセットになる場合が多い。沖ノ羽遺跡の場合はセット関係が不明瞭であるが、瓦塔のみのセットか部位不明の屋蓋部片（図版 205-1758）が瓦堂片になる場合には瓦塔と瓦堂のセットになる場合も想定できる。また、瓦塔は仏堂に納められる例があり、仏堂周辺に瓦塔が集中して検出される例が認められる〔小林 2004・植村ほか 2004 など〕。沖ノ羽遺跡の場合は第 18 次調査 2 区の SK119 で 2 点と 3 区河 1 上層周辺で 4 点が出土し、これ以外は単独出土である。2・3 区の調査区内に仏堂的な施設は認められないことから、この 2 地点周辺に仏堂などの施設が存在する可能性が高い。

時期的な位置づけとしては第 18 次調査 3 区河 1 上層周辺から 4 点の瓦塔（図版 205-1750 ～ 1753）が出土している。同層位の土器の分析（本章第 2 節参照）から春日編年Ⅵ 2・3 期（9 世紀第 4 四半世紀）〔春日 1999・2010〕と位置付けられる。また、第 18 次調査 2 区 SK119 では土坑内から須恵器無台杯（図版 131-152）、黒色土器無台椀（図版 131-150・151）と瓦塔 2 点（図版 205-1740・1741）が伴出しており、佐渡小泊産の薄手の須恵器

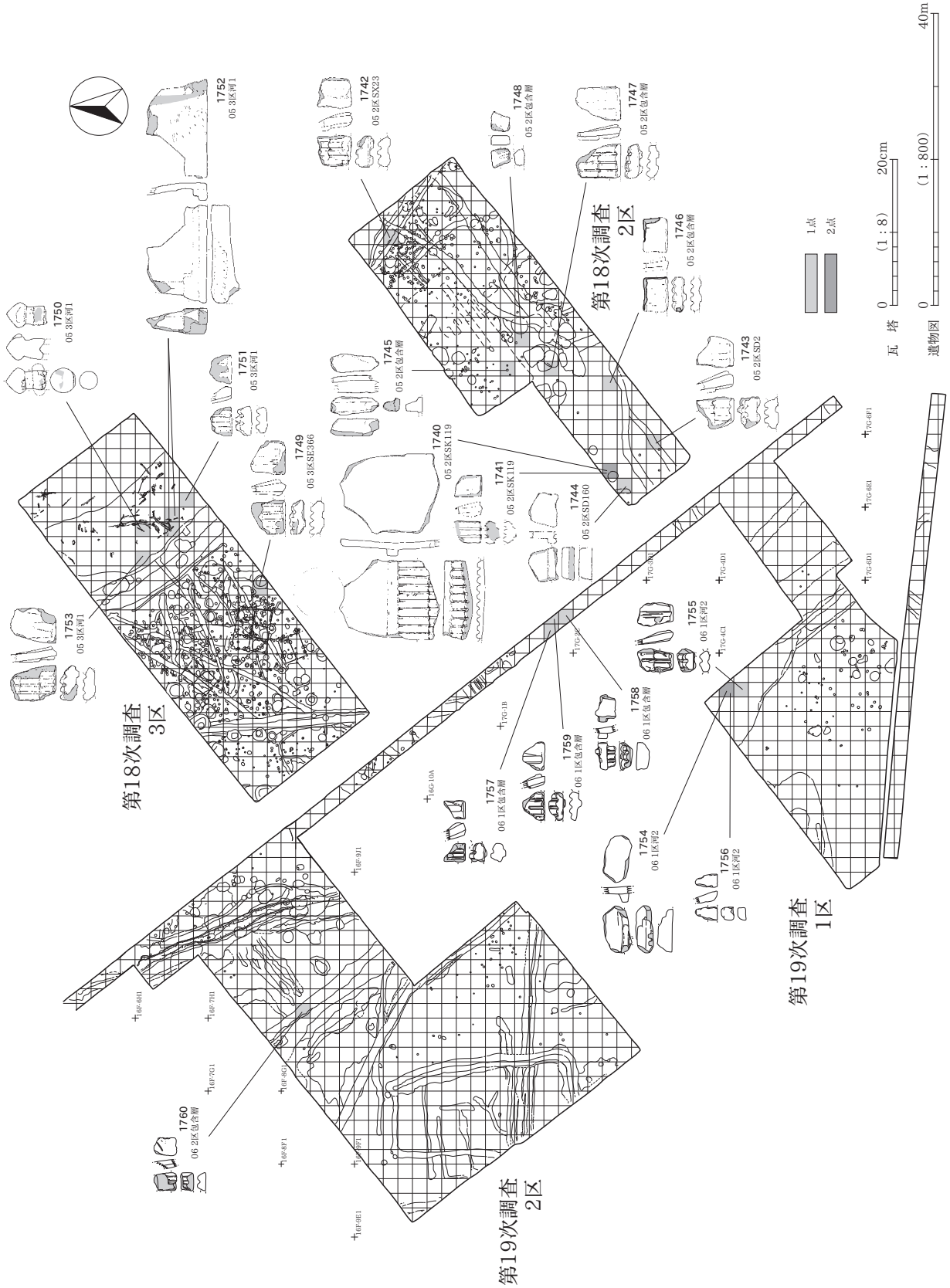


七重の瓦塔
駒込遺跡〔田中2004〕

五重の瓦塔
東山遺跡〔駒宮・栗岡1994、今泉ほか1993〕

三重の瓦塔
小谷遺跡〔田中・池田ほか2000〕

第 47 図　復元瓦塔例（縮尺不同）


第18次調査
3区
第18次調査
2区
第19次調査
2区
第19次調査
1区
1752
05 3区河1
1750
05 3区河1
1751
05 3区河1
1753
05 3区河1
1749
05 3区SE366
1742
05 2区SX23
1748
05 2区包含層
1747
05 2区包含層
1746
05 2区包含層
1745
05 2区包含層
1740
05 2区SK119
1741
05 2区SK119
1744
05 2区SD160
1743
05 2区SD2
1755
06 1区河2
1758
06 1区包含層
1759
06 1区包含層
1757
06 1区包含層
1754
06 1区河2
1756
06 1区河2
1760
06 2区包含層
1点
2点
0
(1：8)
20cm
0
(1：800)
40m
瓦　塔
遺物図

第48図　瓦塔出土状況

無台杯の推定時期から春日編年Ⅵ２・３期に位置づけられる。第 18 次調査２区 SD2 では土師器無台椀（図版 132-185･186）と長甕（図版 132-187）、仏鉢形土器（図版 132-188）、黒色土器無台椀（図版 132-189）と瓦塔１点（図版 205-1743）が出土している。年代の指標となる須恵器無台杯などが出土していないが、SD2 が春日編年Ⅵ期に所属する第 18 次調査２区 SD1 に切られるため、春日編年Ⅵ期の後半であるⅥ２・３期に所属する可能性が高い。以上のことから沖ノ羽遺跡の瓦塔は包含層出土を含めてⅥ２・３期（9 世紀第４四半世紀）に限定されよう。このことは瓦塔の編年を行った池田敏宏氏の論考〔池田 1999・2005〕の編年とも整合性が高い。沖ノ羽遺跡の屋蓋部は「幅狭工具押し引き手法 C 手法」によって丸瓦のみ表現されている。軒裏垂木表現は「ヘラ削り出し C2 手法」によって行われている。これらは池田氏の「東郷台類型」にあたると考える。また、屋蓋部の製作技法は粘土板１枚によって基本的な成形を行い、天井部に突帯が巡る。完形の資料が無いため不明な点が多いが、勾配は（図版 205-1740）の資料から突帯から先端に向かってゆるやかに傾斜しているようであるが水平に近い。屋蓋部製作技法を検討した坂田敏行氏の分類〔坂田 2009〕によるとⅢａ類である。さらに、瓦継目表現も少なく、瓦塔の材質が土師質であることも池田氏により９世紀代の瓦塔の特徴とされ〔池田 2004〕、その点からも、９世紀後半に位置づけられる。

新潟県内の瓦塔資料の集成を行い、沖ノ羽遺跡出土瓦塔の様相を考えたい。越後国で７遺跡、佐渡国で３遺跡[1]から出土している。越後国では沖ノ羽遺跡の他に上浦Ａ遺跡[2]、緒立Ａ遺跡〔渡邊 1998〕、山ノ脇遺跡〔斎藤 1998〕、子安遺跡〔笹澤 2003b〕、黒田古墳群〔尾崎 2002〕にある。佐渡国にはカメ畑窯跡〔原田 1927〕、栗ノ木沢窯跡〔内藤 1939、本間・椎名 1958〕、小泊窯跡群（南外地点）〔内藤 1939、本間・椎名 1958〕がある。ほとんどが各遺跡１点程度の出土で、複数破片が出土しているのは沖ノ羽遺跡を除いて緒立Ａ遺跡とカメ畑窯跡のみである。以下に各遺跡の概要を述べる。

緒立Ａ遺跡例は５点（第 39 図 6-1 ～ 5）全て包含層出土である。池田氏により「宮ノ前類型瓦塔に類似した瓦塔」とされ、９世紀前半に位置づけられている〔池田 1999〕。緒立Ａ遺跡は８世紀後半から９世紀前半[3]に土器の主体時期があり整合性が高い。

山ノ脇遺跡からは包含層で瓦塔（第 49 図 7-1）が出土している。遺跡主体時期は８世紀後半から９世紀後半まで長期に及ぶが、屋根瓦の表現が丸瓦表現のみであることから９世紀代と考えられる。

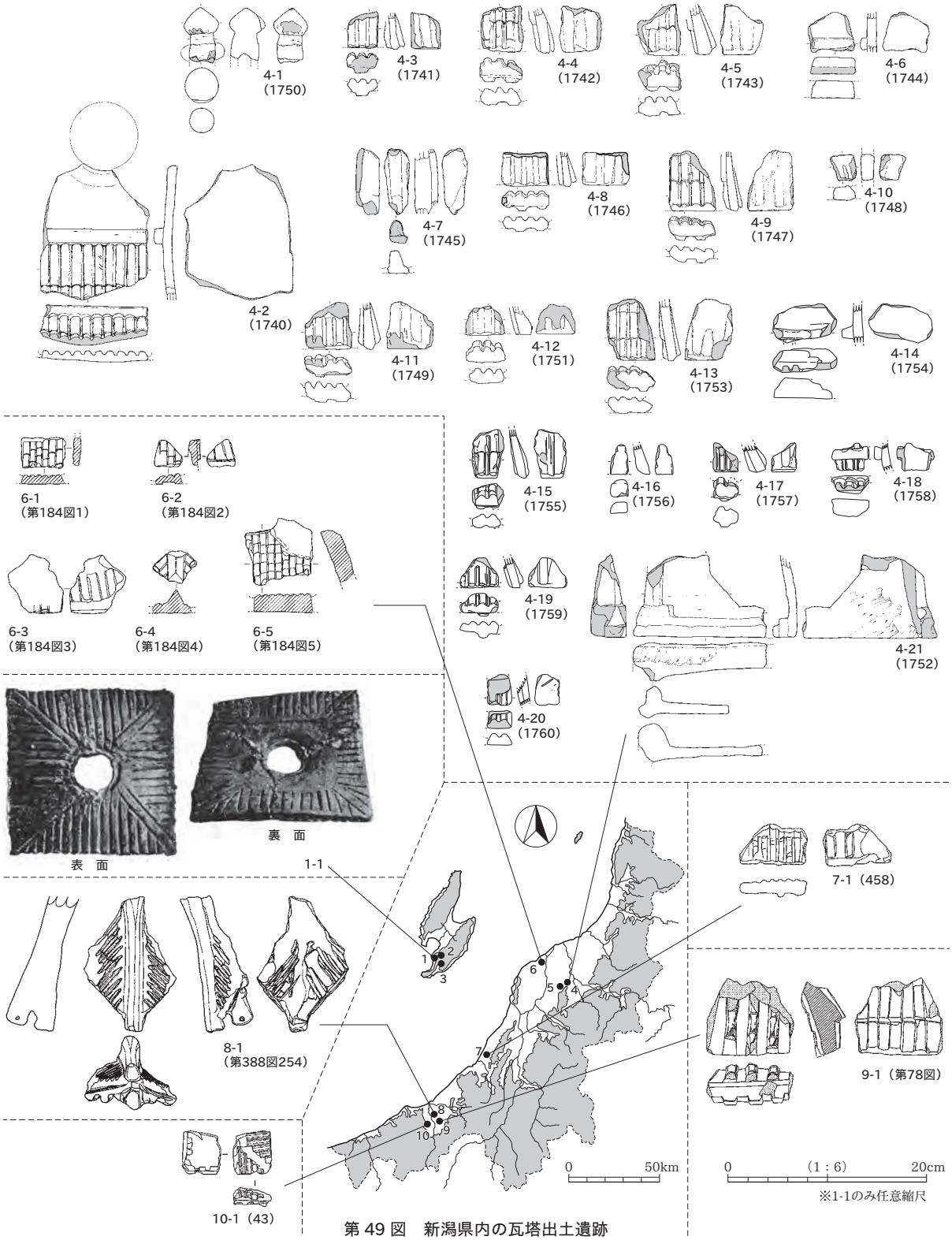
子安遺跡から土師質の瓦塔隅棟部１点（第 49 図 8-1）が出土している。出土地点は中世の溝からである。風鐸穴の表現が隅木に穿たれており、屋根瓦の表現は沈線で施されている。子安遺跡は８世紀中葉から 10 世紀前半まで営まれた拠点的な集落である。伴出遺物が明確でないため位置づけが難しいものの、土師質であること、垂木表現が明確であるが屋根瓦の表現が省略されていることから９世紀中葉に位置づけられよう。池田氏の分類では西原類型・類似資料である〔池田 1999〕。

今池遺跡からは瓦塔１点(第 49 図 9-1)が９世紀第４四半世紀の溝である SD3 上層から出土している。ただし、瓦塔は須恵質で平瓦表現もされていることから８世紀代の所産と考えられ、遺構への後世の流れ込みと判断される。

黒田古墳群では瓦塔屋蓋部片１点（第 49 図 10-1）が 20 号墳表土から出土している。表面は丸瓦部の表現のみである。平安時代包含層から８世紀後半から９世紀前半の土師器・須恵器が出土しており、その時期幅に収まる資料と考えられる。

カメ畑窯跡から出土した瓦塔は新潟県内で唯一屋蓋部が完形復元された資料である（第 49 図 1-1）。資料は実見していないが[4]、屋蓋部の表現は「幅広工具」で沈線様に表現されているようである。瓦継ぎ目は確認出来ない。

1）佐渡市世界遺産推進課文化財室埋蔵文化財係　堅木宜宏氏のご教示による。
2）平成 10 年度旧新津市教育委員会確認調査資料による。詳細は不明である。
3）以下、伴出土器の年代観は春日真実氏の年代観〔春日 1999・2013〕に従った。
4）佐渡市教育委員会所蔵資料



第 49 図　新潟県内の瓦塔出土遺跡

第 13 表　新潟県出土瓦塔一覧表

No.	遺跡名	種別	所在地	出土部位					焼成	文献	備考
				宝珠	屋蓋	初軸（基壇）	不明	計			
1	カメ畑窯跡	窯跡	佐渡市大字小泊		1			1	還元炎焼成	〔原田1927、山本・計良1988〕	大正10年頃採集品
2	栗の木沢窯跡	窯跡	佐渡市大字小泊				○		不明（還元か）	〔内藤1939、本間・椎名1958〕	字栗の木沢711
3	小泊窯跡群（南外）	窯跡	佐渡市大字小泊				○		不明（還元か）	〔内藤1939、本間・椎名1958〕	字南外587
4	沖ノ羽遺跡	集落跡	新潟市秋葉区七日町	1	20	1		22	酸化炎焼成	〔本書〕	瓦堂の可能性のあるもの1点含む
5	上浦A遺跡	集落跡	新潟市秋葉区福島				○				新津市教育委員会平成10年度確認調査資料
6	緒立A遺跡	集落跡	新潟市西区黒鳥		5			5	酸化炎焼成	〔渡邊1993、渡邊1998〕	
7	山ノ脇遺跡	包蔵地	刈羽郡刈羽村大字井岡		1			1	酸化炎焼成	〔斎藤1998〕	
8	子安遺跡	集落跡	上越市子安新田		1			1	酸化炎焼成	〔笹澤2003b〕	隅棟
9	今池遺跡	集落跡	上越市今池		1			1	還元炎焼成	〔坂井ほか1984〕	
10	黒田古墳群	包含層	上越市大字黒田		1			1	酸化炎焼成	〔尾崎2002〕	

材質は須恵質と考えられる。カメ畑窯跡は「カメ畑 1･2･3 号窯」として新潟県内の須恵器編年の基準資料〔坂井･鶴間・春日 1991〕となっており、窯跡出土須恵器は 9 世紀中葉に位置づけられている。大正時代の採集資料であることから、坂井氏等が用いた須恵器資料と同じ窯資料であるとの確証は無いが、瓦継ぎ目表現が無いなど退化的な表現が多く見られ、おそらく須恵質の資料と思われる。型式的には後出の様相が見られることから、9 世紀中葉の位置づけが妥当と考える。カメ畑窯跡例は窯跡からの出土の可能性が高く、他遺跡と異なり生産遺跡の出土例である。

以上、実測図・写真が掲載された資料を基に新潟県域の資料を確認したが、今池遺跡・子安遺跡の隣接する 2 遺跡が 8 世紀代の可能性が高く、それ以外の資料は 9 世紀代に位置づけられる。

北陸では富山県 15 遺跡、石川県 20 遺跡、福井県 5 遺跡の 40 遺跡が確認されている〔富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2004〕。北陸地方の瓦塔の様相把握を行った善端直氏の論考〔善端 1994〕では、8 世紀中葉に越前国（福井県）と越中国（富山県）で確認され 8 世紀後半から 9 世紀前半に多く確認され、10 世紀前葉まで製作されるようである。越後国（新潟県）でも前述したように 8 世紀（中葉か）に開始され 9 世紀後半まで継続的に製作される様相が把握できた。佐渡国においては須恵質瓦塔が 9 世紀代まで製作されており、越後国側とは系譜が異なる可能性が高い。

新潟県の中での分布で気になる点がある。現状では阿賀野川以北からの出土例は無く、分布的に断絶がある。東北地方では宮城県で 1 遺跡、山形県 1 遺跡、福島県 4 遺跡が確認できるのみで〔坂田 2009〕、新潟県に隣接する山形県庄内地方と福島県会津地方では確認されておらず、分布の断絶が確認される。すなわち北に行くほど信仰対象としての瓦塔の需要が少なかったと考えられる。坂井秀弥氏が越後国（新潟県）を含めた北陸の国分寺・国庁の所在が明らかになっていない原因として、建物に使われる瓦の量が相対的に少ないことが関係しているのではないか､そしてその主原因は積雪であると論じられた〔坂井 2004〕。これらのことから瓦塔の分布を考えると、瓦葺きの建物が越後国では相対的に少なく、信仰の対象である瓦塔が信仰対象とは認識されなかったと考えられないか。つまり瓦葺建物の存在を知らない住人が多かったのではないだろうか。また、瓦塔が出土しているのは佐渡地方と新潟市・刈羽村・上越市など上越を除く海岸端に集中しており、現在の新潟県内でも積雪が少ない所に集中しているとの見方もできる。風土的な要素も瓦塔が新潟県の積雪多量地域に少ない理由にならないかと考える。但し、阿賀野川以北に仏教の伝達が行われていない訳ではなく、9 世紀後半の新発田市坂ノ沢 C 遺跡〔渡邊・田中 2001〕に見られる須恵器仏鉢形土器の出土の多出などは仏教信仰の痕跡であろう。

沖ノ羽遺跡は別項で述べられる仏鉢形土器の多出、緑釉陶器香炉および蓋の出土、「寺」「花寺」墨書土器と瓦塔出土などの間接的な証拠から仏教施設遺構の存在を示すものが多く見られる。近隣に所在する沖ノ羽遺跡とほぼ同時期の駒首潟遺跡〔渡邊ほか 2009〕の 2 間 2 間の仏教関連施設とともに地域の拠点的な仏教施設が沖ノ羽遺跡内に建造されたとみるのが妥当であろう。

以上、沖ノ羽遺跡の瓦塔について考察を行ったが、資料の僅小さから型式的な検討が十分ではない。時期の決定にあたっては伴出土器を中心に考えたが、遺構出土の一括資料が少ない点が難点である。今後の資料の増加に期待したい。